The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Practical Realities of Meiji-Period Women's Education : Iwamoto Yoshiharu and His Policies at Meiji Jogakkō
Author(s)	Lukminaite, Simona
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/82270
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（LUKMINAITĖ SIMONA）	
論文題名	The Practical Realities of Meiji-Period Women's Education: Iwamoto Yoshiharu and His Policies at Meiji Jogakkō (明治時代における女性教育の実情: 巌本善治の明治女学校における方針を中心に)

論文内容の要旨

日本の教育機関は、学生数の減少や他国に後れをとることを恐れ、グローバルに競争できる環境を構築することにますます力を注いでいる。その中で、国際基準を満たしつつも日本独自の価値を失しない理想的な教育の在り方への探究が今も続いている。このプロセスの原点とも言える明治時代の教育における理想的かつ実践的な要素は、現代の教育問題への洞察において重要な手掛かりとなろう。

この観点から、明治女學校の取り組みは極めて重要で、前例の宝庫と言っても過言ではない。女性教育にとっては過酷な時期であったと言われる明治時代（1868～1912）に行われた革新的なアイデアや実験を考察するに当たって、この学校は特別な意味を持つ。明治女學校は、表向きはキリスト教の学校だったが、実際に学校の運営側のほとんどは旧武家出身者であり、宗教宗派や他の投資家の影響から独立した若い日本人プロテスタントの知識人であった。日本と外国の学習慣行を結び合わせる目的で構想され、1885年から1909年にかけて存在したこのプロジェクトはなぜ実施されたのか。その理由とその特異性を考察することによって、明治中期から後期の教育者と女子学生が、自らの望む近代的日本教育の基盤とも言えるものを実現させようとする中で経験した苦闘を理解する道が開かれる。

本論文の構造はイデオロギーと実践の両柱からなり、またそれらを東アジアの古典的な文武の概念を解釈することによって理解しようとするものである。文武の影響は明治女学校で教育に携わる人々（教員と生徒）が執筆したものにもよく表れている。この文武の概念は、教育における「調和」または「完全性」を強調し、それを「読む」こと/知識の蓄積（文）を基に行動を起こす/身を以て体現する（武）という意味を内包するもので、これ自体は特に新しいものではないが、1890年以降に学校の出版物で大々的に謳われるようになったものである。文と武どちらも人生を築く永続的な教育と見なされ、このことは、それぞれの語尾にしばしば「道」が続いたことからも窺える。

1947年の教育基本法によって設定された学術基準を刷新すべく、2006年以降の日本の教育システム方針は伝統、道徳教育、武道に重点を移してきたが、それによって文武の概念は現代の日本教育の議論で再び注目されるようになっている。政治的な意味合いを除けば、その概念は日本の教育に関する議論の場で広く認知されており、またそれに類する概念は東アジア文化圏以外で見かけられることも珍しくない。Rein Raud氏は、“cultural systems”と“meaning creation”において「テキスト」及び「実践」を中心としたモデルについて、“the textual and the practical [...] two sides of the same cultural coin”と呼んでいる。文武概念を強調した明治女学校は、Raud氏の説とも類似する、テキスト（アイデア）と実践（アクション）の二柱に基づき、独自の文化システム内で学校の目標を設定したのであった。明治女学校におけるこのようなテキストの使い方、その実践、そしてそれらの相互関係は、その時代に議論されていた「文化」（および「教育」）のモデルを解明するのに重要な手掛かりとなる。

上記に鑑みて、本論文では明治女学校においてアイデアが活動とどのように影響しあって進化したかに重点を置いて考察する。従って、明治女学校の動機（イデオロギー的根拠）に焦点を当てることや、その成果を成功または失敗（最終結果）として評価するというアプローチはとらない。こうすることで、明治女学校がそれらの事業を実施するに当たって統一性を維持しようとする中で直面した実践的かつ理論的な問題がより強調されるという効果がもたらされるのである。特に、明治女学校が、生徒を引き付け、彼らのニーズを満たし、また彼らの家族の期待に応えると同時に、

常に変化を成し遂げる政治的および社会的風土に適応する様々な要素に調和をもたらすように努める上で、いかに学校の活動や目標を構想し、実行したかを探ることが本論文の主な狙いである。

より具体的に述べると、本論文は、マクロレベルでは、当時政府が推進した議題と、それが当時どれほど徹底的に国民に到達したか（あるいは到達しなかったか）を考察する。そして、日本のキリスト教界における知識人の男性及び女性の間の知的慣行と活動、特に彼らが自らの最先端の教育・文学・ライフスタイルを明治社会に浸透させようとした努力に着目する。ミクロレベルでは、本論文は、明治女学校の政策の大半を構築した主唱者である巌本善治（1863–1942）の著作を分析し、彼の教育関連のアイデアと活動を考察する。本論文では、巌本善治の著作を分析することを原点としながらも、明治女学校の生徒、スタッフ、その他の関連文人が教育の理想と実践を共同して生み出すことになった、その交渉のプロセスを特に重視する。

本論文で使用した情報源は明治女学校のスタッフと生徒によって作成された出版物である。これらの出版物は、明治女学校の教育を正当化し、大衆に独自のモデルを浸透させることを目的としたものである。これらは、主に雑誌、教科書またはマニュアル、および伝記的あるいは創造的な執筆等で構成されている。そのような執筆のいくつかは、先行研究で既に取り上げられている。しかし、明治女学校とそのスタッフに関する研究は様々な学問分野に及ぶため、本論文でこれらの調査結果を整理した。さらに、日本語研究分野でも良く知られていない一次資料を紹介したため、点と点を結び付け、明治女学校の活動の全体的な傾向を英語の読者向けに明確にした。

本論文は、歴史のさまざまな分野のテーマを分析し、教育、フェミニズム、文学、宗教、武道等という分野に携わっている。しかしその中でも、本論文の主たる狙いは思想史という分野に貢献することである。したがって、思想史家の役割に関してQuentin Skinner氏がいうように、思想史家としての私の目標は、下記の通りである：“to appreciate how far the values embodied in our present way of life, and our present ways of thinking about those values, reflect a series of choices made at different times between different possible worlds [to prevent a] hegemonic account of those values and how they should be interpreted and understood.”

本論文の調査結果として明らかにするのは、明治女学校がどのようにして、出身、資料の作成日、本来の読者の性別などに関係なく、さまざまな情報源を集め、女性のための教育モデルを構築したかである。このように、象徴的な権威による承認を求める文化機関であった明治女学校は、学校での慣行を意図的に選択することによって「伝統的」と「近代的」という二つのラベルを作成する全国的な運動に少なからず参加していた。同時に、明治女学校のイデオロギーと実践が、学校の生徒自身も含め、さまざまな当局からの検閲や批判などを含めた外部要因の影響に晒されやすかったことを明らかにする。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ Lukminaite Simona ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	加藤　均
	副 査　教授	岩井 茂樹
	副 査　准教授	佐野方郁
	副 査　教授	五之治昌比呂
	副 査　准教授	水野亜紀子

論文審査の結果の要旨

提出された論文、“The Practical Realities of Meiji-Period Women's Education: Iwamoto Yoshiharu and His Policies at Meiji Jogakkō”は、明治女学校（1885－1909）の第2代校長で、1885年に創刊された日本初の婦人雑誌『女学雑誌』の編集者としてもよく知られている巌本善治（1863-1942）のその学校での教育方針や教育実践に着目することで、明治期における女子教育の展開を現場での実際的な動きから捉えなおそうとする非常に意欲的な研究である。

本論文は六つの章からなり、まず第１章（Introduction）において、巌本善治に関する戦後の研究は『女学雑誌』に掲載されたその理念的著作の分析に集中しており、明治女学校という教育の場における女子教育の実践者としての側面が看過されてきたと指摘する。

第2章（Historical Setting: Continuity and Innovation）では、江戸期からの女子教育の歴史的展開を踏まえたうえで、巌本の一連の出版活動は、明治女学校を新時代にふさわしい女性を育成する学校、すなわち‘Modern School for Modern Women’と一般に受け取られるよう、そのイメージを形成するためのものであったと主張する。

第3章（Theoretical Clashes: Understanding the Body-Mind, Secular-Religious, Western-Japanese and Traditional-Modern Dichotomies）においては、巌本が明治女学校の教育方針として強調した「文武」という概念こそが、近代日本が経験することになった心-身、世俗-宗教、和-洋、伝統-西洋の二項対立的世界を解消するものであったと論じる。

第4章（Practical Realities I:Meiji Jogakkō's “Bu”）では、文武の「武」の考察に入る。当時の日本の知識人の間では、スペンサーの教育論として「知育・徳育・体育」の三育が浸透していたが、巌本、そして明治女学校は「武」を一義的には「体育」と位置づけつつも、それに薙刀などの武道だけでなく、女礼をも包含させることによって「徳育」の要素を加味し、「実用的伝統」と捉えなおして実践していったとする。

続く、第5章（Practical Realities II: Meiji Jogakkō's “Bun”）で、文武の「文」を取り上げ、巌本は教育的な側面から小説の執筆と読書を奨励し、そこに「徳育」の発展の可能性を見出そうとするばかりか、女流作家を社会改革を先導する能力をもつ存在と評価し、一種のロールモデルとして提示していることを明らかにする。

最終章の第6章（Overall Conclusions）において、これまでの考察結果をまとめるとともに、明治女学校での巌本の実践は「文」と「武」の面からジェンダー規範を拡大する試みであり、それは同時に当時の教育界の実情に合わせようとした現実的な対応でもあったと結論づける。明治女学校自体は1909年に廃校となるが、津田梅子（1864-1929）の女子英学塾や羽仁もと子（1873-1957）の自由学園などにおいて、巌本の考え方は活かされていくという。

巌本善治は、毀誉褒貶の激しい人物であり、また、彼が校長を務めた明治女学校の廃校により多くの資料が失われたため、『女学雑誌』等に残るその思索の跡にどうしても研究者の注目が集まり、ある意味、思想家として捉える傾向が強くなってしまうが、巌本は女子教育の実践家であったことを忘れてはならない。女学校を運営し、存続させていくには、宗教教育を禁じた学校教育制度を遵守しなければならず、生徒を集めるためには時代の潮流を全く無視するわけにはいかない。巌本に機会主義的な言動があったことは否めない事実であったとしても、継続性が重視される教育の現場で彼は何を考え、何を実践しようとしたのか、この点を本論文では、巌本のものだけでなく、明治女学校の教師やかつての生徒であった人々の言説を丁寧に拾い上げることで描き出そうとする。そこで明らかになってきたことは、文武両道という昔からよく知られた、一般にも浸透している言葉を用いて、それに「三育」といったヨーロッパ的な新たな考えを入れ込み、女子教育を発展させようとする巌本の努力の跡であった。これは巌本善治自身の再

評価につながる研究成果であり、そればかりか、近代日本における女子教育の展開過程を考える上でも重要な示唆を与えるものである。

以上、審査したところにより、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位（日本語・日本文化）にふさわしいものであるという結論に至った。